

山行報告書

通算山行NO	NO. 1233	報告者	大根田 元男
年月日	98年3月27日(金曜日) ~	年月日	年3月29日(日曜日)
山行名	山スキーと登山		
山名	平標山(1983m) ~ 仙ノ倉山(2026m) 谷川連峰最高峰		
この山のセールスポイント	谷川連峰最西端の山。展望と広大な雪原の稜線歩き。		
コース及タイム	3月28日 天候(晴) 水上温泉(起床5:00) 出発6:25 ~ 元橋 6:00 ~ 6:30 ~ 平標山登山口 7:45 平標山11家上 10:00 ~ 10:15 ~ 平標山仙ノ倉山後継 10:50 ~ 仙ノ倉山 11:35 ~ 平標山 12:35 ~ 13:25 ~ 松手山 15:00 ~ 元橋登山口 16:50		
標高差	△ 980m ~ 2026m ≙ 1046m	体力度	1 2 3 4 (5) 6
	▽ 2026m ~ 980m ≙ 1046m	技術度	1 2 (3) 4 5 6
走行距離	2日 向ト-71Lマ ≙ 700 Km	展望度	1 2 3 4 5 (6)

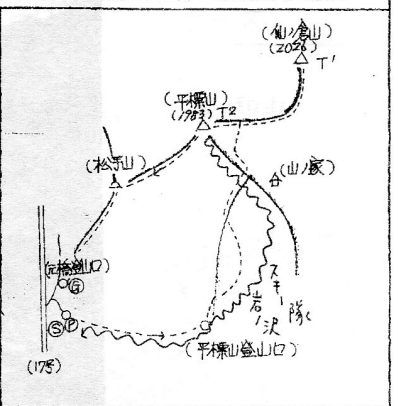
参加者・役割	CL	後藤 隆徳 51	仙ノ倉山は立派な山だった	高岡 八千代 60	又スキーを背って帰った
		佐野 雅道 66	疲れしました	末生 博子 49	昨年の念願がかなってよかった
		大根田 元男 62	広大な雪原歩き気分がた	河野 仁美 34	仙ノ倉山は遠かった
		小田 知典 49	ラッセル計算してくれたカモンカありがとう	河合 依代 51	少しも登れなかった山麓からの雪原 30分くらい
		山本 勝己 30	下の雪斜面道は楽しかった	御宿 マよ 53	仙ノ倉山頂上で感激
		加藤 幸子 49	よい滑りができた	会員 11名・一般 名・全体 11名	

第 目 録

起床したときから水上温泉地は霧雨であり今日の谷川岳は晴天候は望めないのではないか?との判断で明日登る平標山、仙ノ倉山に予定を変更して元橋登山口へ向う夜が明けて来た遠くの山々も見えだし変更して良かったと思った。

全員が平元新道のコースで行くことにする昨年歩いた時に比べ雪量があり平標山登山口まで歩くのに少し時間がかわった。河合が遅れたのでコースの要所に赤布の目印をし木に付けて先行する。私達より先に行った他グループの足跡をたどったら平元新道の沢を歩くことになった。雪が深く所々で腰まで没してしまひ上がるとの難儀している人もいる。沢は雪が深いのでツツ樹林の尾根を掴み小田、ラッセルに頼る。

前方にカモンカの横切る等が見えれ何となく和らいだ気持ちなる。休憩しているとスキーで登って来た10名ほどのグループだったが体力もそろってたいしたグループだと思った。尾根は雪が締っていて大変歩きやすい。平標山11家上の尾根に出ると雪原となり平標山から仙ノ倉山方向のスロープは素晴らしい眺めだった。仙ノ倉山への近道を行きコース上の鞍部にザックを置いて身軽にして行く。途中に立派なエビのシッポや風による雪の造形が面白い。目的地の山と思いたどり着いた所は手前のコブ山で前方にはこより高く見ゆるコブがこつもありかわり。雪原だけのため距離感がつかせにくく仙ノ倉山が遠く感じられた。このコースは視界を妨げる物はなく大変いい展望歩きだった。頂上で360°のパノラマを堪能して3は返す。アツポダウンの続く最後登りに頑張る平標山頂に着いた。こも展望360°雪囲いの山である中で一休みして全員揃ったのちスキー組とつばえ組に分かれて下山開始。スキー組の滑降を見送ったあと松手山コースに下る。足が膝までは有り歩きにくいのでワカンを装着して前坂を下る慎重に歩くので進みが遅い。この尾根道もパノラマコースの名がっつりい?



景色がよく苗場山を正面に見ながら歩く。左側のガザに雪庇が長く続いていて安全に注意して木の生えている際を歩くが気持ちのよいものでよい。送電線の大鉄塔からは急降下になっており、シラセー又を行いなから下る。御宿はなかなか様になっていて面白い。

	歩くのより、シリゼー又は大分早く下ることが出来る。元橋登山口で早く着いていたスキ組と合流して直ちに水上温泉に向う。 今日の雪上歩も十分に満足できました。
自然記述	真白な雪原は雄大ですばらしい。
備考	1. 雪に対する顔の防護対策 (自顔面くちび2) 2. 雪庇のある場所の通過 径路の選定を誤らぬこと。 3



(上) 一息入れて  
これから本番

(下) 誰かだー  
小田だー  
下田だー



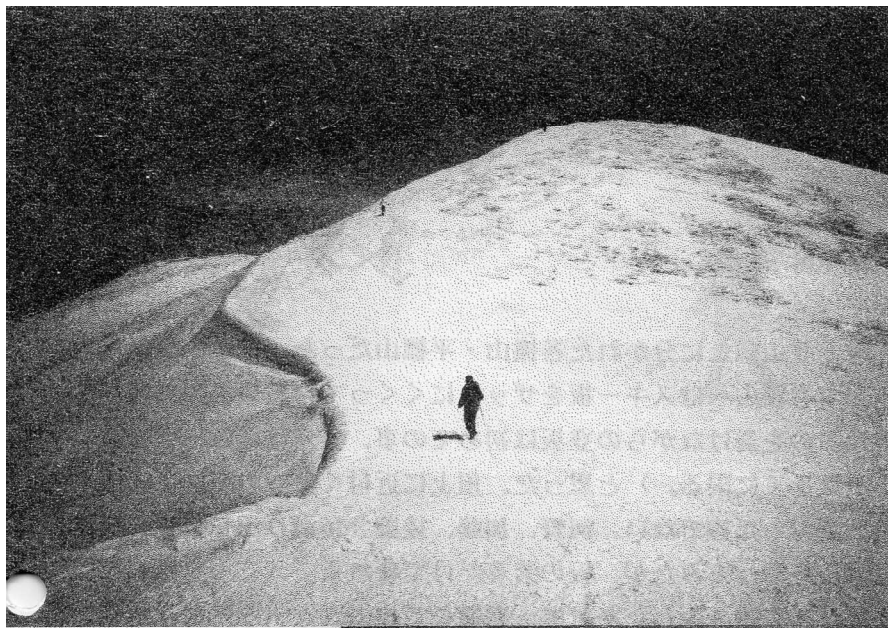
作中、早急スのズ、と、は、る、の、ま、  
 山、木、の、と、ま、の、ま、の、ま、  
 山、木、の、と、ま、の、ま、の、ま、  
 山、木、の、と、ま、の、ま、の、ま、  
 山、木、の、と、ま、の、ま、の、ま、



はしけ飛ぶ  
 雲引きの



(上)ラッセル、ラッセル。  
 先頭小田の誕生記念の  
 ラッセルだー。  
 本  
 (中)白根山を背に  
 気持ちの良い稜線を  
 行く。  
 (下)板を背負って  
 今年こそスベルゾー。  
 (高岡)



夫  
へ  
チズお宿合山落の平和  
受意、し賢崎々少り品縛  
へはにマ木が通る足跡に  
ズキーはいて、チズ山  
ちよこま、ハ益ひがに  
日まのるすての解るリ

式こう山崩者ち階式の  
ぶる天融き帯林樹々  
天思さひがはほまゆる  
見つひ思の眼許多人も  
、よく、はひ式の條子  
  
そして、今年もまた  
見送った人  
今年も  
の山々が  
右にそれで  
し、戻って行くなら



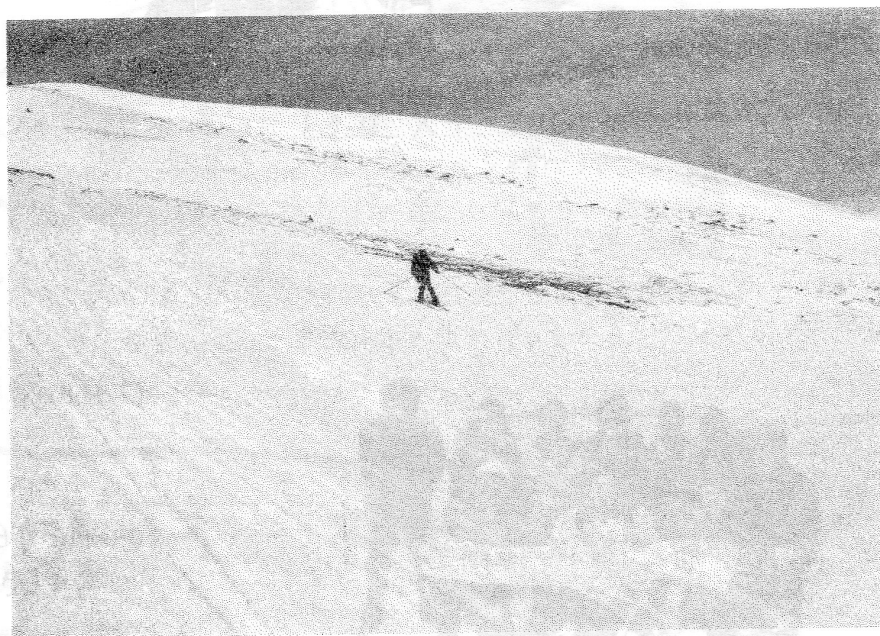
# スキーツアーへのステップ

再び平標へ

来生博子



昨年の春山合宿はスキー隊と登山隊とに分かれた巻機山・平標山だった。富士山の低地と乗鞍岳で少々練習し、意気込んで巻機山へはスキー板をザックにくくって背負いあげたのだが、つば足と板が木々に引っ掛かるのを避けながらの登坂は初めての事、非常に疲れ、〈なによ、山スキーなんて、やめた！山は歩くに限る。〉と思った。頂上に近付くにつれ雪はアイスバーンになり益々、私ごとのおよぶところでない。河野、加藤、後藤会長滑り出しも良くシュプールを描いて下るのを見送り後を滑ってみたが、板の装着だけで疲れ果て、立っては転び、立直ればコントロール不能で倒れるを繰り返し、あれで、普通ここまで来ないなんて学生たちに笑いの提供してしまった。滑るつもりで上げたのに高岡と共に担いで降りた憎き巻機山だった。翌日の平標はスキー板を持たずに登山に撤したのだが、マンサクの咲く樹林帯を越えると昨日とは違い広くなだらかな大自然のゲレンデが目の前に広がり、滑れるかも知れないと思えば板を担ぎ上げなかったのが悔しかった。またも、気持ち良さそうに滑る3人を惜別の思いで見送り、山スキーと一緒に始めた高岡と〈来年も来てもらって、こんどこそ滑りたいね。〉と、切望した平標だったのだ。



（平標山頂で）スキーと靴、ストック、etcで20kg、これを背負い登りそして滑る  
（人物加藤）



### 3/28 平標山 "夢の大斜面" の加藤と河野

そして、今年も訪れた。登山隊の新しい仲間と谷川岳・平標山へ。私の密かな目的は羨望で見送った大ゲレンデをせめて半分でもスキーで滑ってみたい。

今年はまだマンサクが咲いてない樹林帯を越えると蒼い空の下、らくだのこぶのような白銀の山々が続く。直前の頂きを踏めば念願がかなう、とわくわくしながら歩く。しかし、進路は右にそれてしまった。どうやら最高峰の仙の倉に向かっている。仙の倉まで4つの頂きを上下し、戻って最後に5つ目の平標山の頂きに登ると、6時間半もスキーブーツでつぼ足をしたため膝からおしりまで筋肉痛で下半身はゲタゲタ笑ってしまったではないか。屋根だけ出した山の家をかなりの傾斜に見下ろす。富士山での経験を思えば恐ろしさはないのだが、疲れた足がコントロールできるか自信がない。案の定、滑り出しですぐに転んだ。山スキーは体力だ。

とはいえ、平標だけだったら足の疲れも無かったのもう少し上手くできたかも、など思いながらヘタでも尾根の出会いまで滑れた事に大満足の平標山。ばんざい！

しかし、この日は天気が良かった。私は大事なミスをおかした。サングラスを忘れて1日中見渡すかぎりの雪原に居たため、夕食時から眼が開かないほど裂傷の痛みを目蓋に感じ、閉じても激痛がし、白目はお酒を飲んだ時以上に真っ赤、両眼の周囲までも赤く腫れあがり、パッキンのばかになった水道の様に涙がボロボロ流れ落ち閉じても開いても同じ状態に寝付けなかった。不覚にも谷川岳はあきらめて、調子の良くなかった河合と、眼を休ませたくテントキーパーを努める事になったのは残念だった。

山名	谷川岳 (1963m)		報告者	小田 知典				
この山のセールポイント	急登が続く白銀の西黒尾根							
コースタイム	3月 29日 天候 ( 晴れ )	起床 (2:00) 谷川岳ロープウェイ駅 (4:15) 西黒尾根登山口 (5:00) 谷川岳頂上、トマノ耳 (9:30) 肩の小屋 (10:00) ロープウェイ駅 (12:00) 土合テント場 (13:10) 裾野市役所 (18:40)						
標高差	△	776 ~ 1,963 = 1,190 m	体力度	1 2 3 ④ 5 6				
	▽	1,963 ~ = m	技術度	1 2 3 ④ 5 6				
走行距離	2日間トータル = 700 km		展望度	1 2 3 4 5 ⑥				
参加者・役割	CL	後藤隆徳	51	二日間、皆さんよく頑張った	記録	小田 知典	49	ビューティフルな雪山でした
	SL	大根田元男	61	苦しくも、登れて良かった				
	SL	加藤 秀子	49	冬山以来サウの山だった				
		高岡八千代	60	西黒尾根、最高でした				
	医療	御宿 さよ	53	雪の谷川岳に登れたのが信じられない				
				会員 6名・一般 名・全員 6名				
第二日目	<p>人の声で目が覚めた、隣のテントだった。二時だ、私の横ではもう佐野がシュラフを丸めた。昨晚この土合に設置したホテルレイホーで皆さんが私の誕生日を盛大に祝ってくれた。口に広がるフルーティな赤ワイン、まろやかな吟醸酒、れいほう鍋等々、皆が持ち寄った一品でテーブルは一杯だ。平標山の頂上では、会長が用意してくれた横断幕「小田チャン誕生日オメデトウ」を掲げ写真を撮った。私の誕生日がこんなに素晴らしいのだろうか？ 来年の誕生日が早く来るといいなあ！ 有り難うございました。</p> <p>前日登った山の疲れもあり、お互いのイビキにも気付かず、ぐっすり眠った。雑炊をお代わりし、来生、河合にテントキーパーをお願いして、谷川岳ロープウェイ駅に向かい、4時15分天神尾根隊と別れ、西黒尾根隊ライトを灯し元気に出発！ 雪で尾根の取っ付きが分かりにくく、一の倉沢方面へ進むが見つからず引き返す、「ここだあ、あったぞー」会長の声が暁の林に響いた、5時になっていた。雪の樹林帯ルートで長い急登だった「ゼゼゼハハハ」ようやくそこを抜けると見通しが良くなった。ラクダのコブへの急斜面が迫っている。後ろの方からは、白毛門が私達を励まし見守ってくれてる様な気がした。その右手山並みにご来光だ、素晴らしい！ 途中アイゼンを付け 一步一步・・・会長と加藤が見えなくなった。山スキーの重量10キロ程私達より多いのに、めずらしく大根田の調子が今ひとつだ。「一息入れようか」となり、ザックを降ろすと遙か上の方から「勝手に休むなッ 早く登って来いッ」ザックを急いで担ぎ 一步一步・・・会長から大目玉！</p> <p>反省・・・二つ目のコブを超えた頃から大根田と私は少しずつ遅れた「ハアハアゼゼゼ」御宿は強い、エライ、記録係の私から努力賞を進呈する。西黒尾根の大きな登りが迫る、登るほどに傾斜が増してくる。雪が多いピッケルとアイゼンが私の分身である。マチガ沢を下に挟み、東尾根のシンセン岩峰群が目を見舞う スゴイ！</p> <p>一步一步・・・最高の天気だ。「ゼゼゼゼ」汗が流れる 緩やかな傾斜になり、右上にトマノ耳が見えてる。天神尾根と合流して頂上に向かう、会長達は降りてきた。会長と握手！ 何時もこの瞬間がウレシイ やったぞおオキノ耳で大根田と握手、お互いにほめ合った。一面の銀世界に「チーズ」</p> <p>山スキーの会長、加藤と河野を見送る 気持ち良さそうだ。肩の小屋を予定通り、天神隊と10時に下山開始 暑い、心地よい尾根を天神平スキー場まで歩き、ロープウェイで谷川岳を振り返りながら下を見ると、スキー隊三人が楽しそうに沢を滑っていた。予定通りテント場へ戻ると、来生と河合がキレイに片づけてくれた。</p> <p>南国から来ている私に、皆が気をつけて早い帰り支度となり、山ちゃんにも運転を頼ってしまった。</p> <p>行動食不足の私に、加藤と河合がプレゼントしてくれた。皆さん有り難うございました。</p> <p>西黒尾根に登っている時は、もうこの尾根はイヤだと思ったが、今はまた西黒尾根に登りたい。きっと中毒症状かもしれない。会長、素晴らしい麻薬を有り難う！ そして皆さんに 合掌</p> <p>♪ テント場の すぐそばに咲いていたイチリンソウ さよなら又来るね</p>							

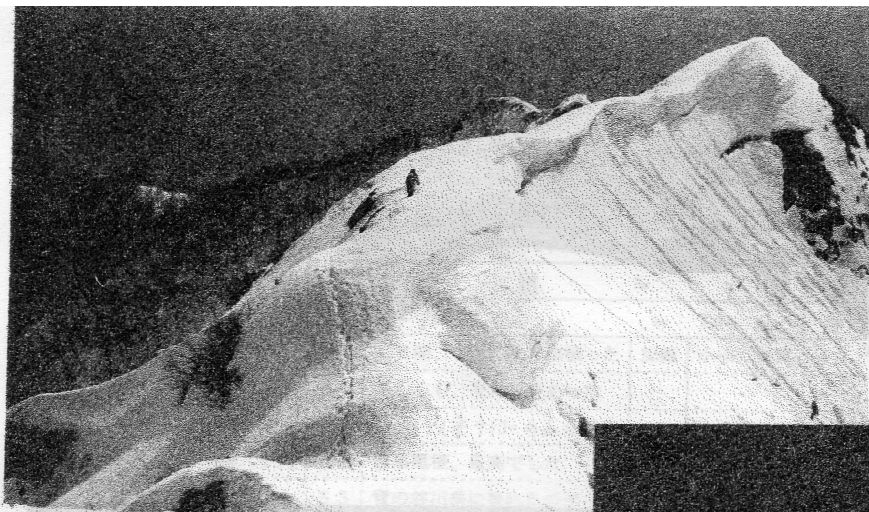


(上)樹林帯を抜けて  
いよいよ急登が始まる。

(中)まだスタミナ十分の  
面々。トマ耳、オギ屏  
を背にして。

(下)初めての雪山に  
御宿はひたすら登る。





(上) ラクダのゴルのナイフリッジ  
すごい雪庇。



(中) 鉄人加ト、谷川岳トマノ耳直下の  
雪稜を行く。

(下) 頂上まであとわずか10分  
余裕の3人!?





(上) ヨッタネ!!  
トマノ耳頂上にて。

(中) スキー隊はこのトマ  
耳から大滑降!!

(下) 戦いすぎて日が暮  
れて、ホッと一息。

# 初の雪山にチャレンジ!

ヤマノケ、雪の谷川岳初登頂 御宿 丁よ  
 絶対雪山はやらな。と心に決めていたのに、どう言う気持ちの  
 変化なのか自分で分からな。雪の谷川岳に見に行った。  
 無理ならロープウェイで天神平まで行って、と言う思いで参加した。  
 1日目 平標山、仙の倉岳の登りは自分でもびっくりする程足運び  
 が軽かった。霧氷や雪模様は美しは今は見れな。自然の芸術  
 だった。その夜谷川岳への意欲が湧いて来て、西黒尾根に登る事  
 に決めた。取っつきから雪の急登で後悔した。この村では谷川岳  
 の山頂に立って。777のゴツからは倉倉や芝草。ふたりに茶屋  
 ついて指導して下り。何の心配もなく安心して登った。谷川岳の頂上  
 立つ時の気持は言葉や文字では表現出来な。程の喜びと感動一杯。  
 白山峰々下り追々は登った者には命からな。下山してからの  
 この数日、日々の生活に勇気と度胸がつかれた程に思う。

## 高岡八千代へ

去年平標に登ったときはスキーでは無理だったので登山隊  
 とはたりに。今年は必ず頂上から滑りたいと。自分の題の  
 中で頂上から滑るまで想像して。滑るスキーと靴さかづい  
 でやっと頂上まで登った。又々、雪に負けた。しまいました。  
 滑るはスリスリと滑っているのに私は転んでばかり。はかばか  
 上手にはりません。でもいつの日か私もと思いはから今年も  
 帰って来ました。

# 山スキーは手強いゾ!



## 素晴らしい感動をくれた山に感謝！ 谷川岳山頂からの大滑降！

by kato

頂上に立つ。周りを見渡す。ウーン。高い。肩ノ小屋から今から滑ろうとする西黒尾根と天神尾根に挟まれた沢筋を見下ろす。見事な程の急傾斜が先でストーンと切れ落ち見えない。雪面はクラスト状態。クラクラッときた。ターンに失敗して谷底へ転がり落ちていく自分の姿が脳裏に浮かぶ。息苦しい！

『駄目だ。私には無理だ！』CLに告げると『何の為に重い思いをして迄、板と靴を担いで西黒尾根を登って来たんだ。今やらないと後悔するぞ。女は度胸だ！』と、事もなげに言っていた。『そうだ。女は度胸だ』これは私の十八番である。そう思った瞬間、山が私を受け入れてくれたような気がした。不思議な事だが、本当にそう感じたのである。

CLの後を慎重に滑り出す。いける！心が破裂しそうな程嬉しい。全身に手応えがあった。沢筋から天神尾根の露岩の天狗の休み場へ滑り込み、此処からはやせ尾根の急斜面が続く。板を外して森林限界上部まで歩く。再び板をセッティング。左から樹林帯の中を縫うように滑ると西黒沢上部の広い沢筋に出た。上部は豪快に快適に滑降する。だが下部になるにつれデブリがひどく滑れる状態の雪面ではない。

加藤は転んだ拍子にストックのワッカが取れてしまい、その後バランスがとれず見るも無惨な状態に陥る。深雪のクレパスを避けられず、頭からスッポリとはまってしまい穴の中で宙ぶらりん。やっとの思いで抜けると、遅れて来た河野がやっぱりデブリで四苦八苦。泣きが入った。『もぉ～ヤダ～。会長！板を流していいですか～？』と、雪面につっぶして動かない。『泣いてる。泣いてる。』と笑いながら『尻滑りで来～い！』と叱咤激励。

やっとな尻滑りで降りて来た河野と一緒に、今度はとうとうと流れる西黒沢の川沿いの急斜面をトラバース。だが、やはり途中から板を担いで谷川ロープウェー下のスノーボード用のコースの出会いまで歩く。あとは圧縮されたコースを思いっきりスピードを出し、全身で風をきる。

『ここは、あまりいいコースではなかったな』とCLは言ったが、私はアクシデントはあったものの谷川岳の頂上から、恐怖を乗り越えて滑った事に大満足であった。1年目より2年目、2年目より3年目とだんだんハードな山スキーになっていくが、その度に新たな感動に新鮮な思いをする。そして更に、高みへと意欲が湧いていく。今一番充実しています。